九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「柳澤騒動」實録の轉化

中村，幸彦

https://doi.org/10.15017/12222

出版情報：語文研究. 26, pp.1-8, 1968-10-31. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

「柳澤騒動」實錄の轉化

中村幸彦

研究対象も少なくないのに、文藝性も低い実録体小説を採上げる理由は別に述べるのでここでは省略するが、筆者としては、粋興でなく、近世文学研究上からも、その必要を痛感するからである。もし研究が進捗すれば、実録体小説自らのみならず、諸方面の研究に資する処も大きいと考へる。そのことは以下にも若干ふれる所があるであらう。実録体小説（以下実録と略す）は、文学として研究対象となったことは殆どない。ただそれ〴〵の内容をなす事件の、史実の研究にのみ用ゐられ、その利用価値の乏しさを証されてゐるが、文学の側からすれば、実よりは虚が問題であり、如何に実から離れ、虚が豊かになってゆく過程が、実録の文学的転化である。本稿では従来の実録のあっかひ方と逆の方向を採るものであることを、先づ述べて置くものである。

一

柳沢騒動と一口に称される実録は、徳川将軍家の云はば御家騒動であって、当面の事件発生後、直に実録が出来、幾変転して、二十巻の大部なもの迄に発達した、色々の点で典型的な実録であるので、既に故三田村鳶魚翁も、その転化の大体を解説したことがある（新版帝国文庫の加賀・伊達・秋田・騒動実録解題）が、ここに若干の新しい資料を合せて、改めて考察することにしょう。

「柳沢騒動」の実録も、その他の実録同様に、そして、それら以上に多くの異本を持ってゐる。初めは十四五葉のものから、二十巻の大部のものに発展した。今日活字をもって流布するもの（近世実録全書・帝国文庫など所収）は、二十巻で、護国女太平記と題する。その筋の大概は、立身出世を望む旗本柳沢吉明後の吉保が、徳川五代将軍綱吉を女色遊堕にさそって、寵遇を得る。やがて婚姻関係によって諸侯を味方につけ、天下の実権を握らうと大望をいだき、六代将軍となる甲州宰相綱豊を呪詛したり、自らの一子吉里を将軍の種と云ひ立て、将軍の養子としょうとたくらみ、既に百万石の墨付を得る。かくては徳川の社稷が危いと見た綱吉の正室、鷹司氏信子が、今は隠退の大老井伊掃部頭と相謀って、病中の綱吉を、自らの手で弑し、一ケ月の後に自らも生命を絶った。よって綱豊が六代将軍の位につき、徳川の天下は無事なることを得たと云ふ。この作中、重大

な事件は殆ど、虚構であることは、早く、林述斎が松浦静山に語ったと、甲子夜話巻十九に見えてゐる。その通りであることは一々、本稿では穿鑿しないが、その為、綱吉や吉保のごとき、当代第一級の文化人達が、作品中では、ひたすら柔弱であり、専ら悪人となってゐる。それも、初めから終りまで、出っぱなしに、紙上に登場するが、一向に性格も具体性がなく、筋のはこび手と称してよいのである。かへって護国女太平記と題するだけあって、三人の主要な女性が、最も注目される。

一は綱吉の生母桂昌院（お玉の方）である。綱吉が学問に熱中して身体を害せぬやうに遊楽をすゝめ、子孫がなくては将軍家が断絶するとて美女をすゝめ、奸邪の弁別なく、口あたりのよい才人を、親孝行の綱吉に近臣としてすゝめるなど、全く世に云ふ甘い母親である。二は吉保の妻おさめである。夫の出世立身の為に、自分の才能と美貌を十分に利用して、桂昌院、綱吉に取入り、果ては、貞操をも将軍に献じて、その一子を将軍の子と認めさせて、養子とすることを迫る。女性の毒婦性をよく示してゐる。三は、この書名の「護国」の所以をなす鷹司氏信子で、国家即ち将軍家の為には、身を殺し、夫である将軍さへをも弑す、烈女型である。甚だあざやかに対照的な、そしてギリシャ悲劇の昔から、永遠の謎でもある女性の特色の三つの面を示してゐるのは、誰人にも注目されるであらう。ただしこの三人の女性も、その性格をあざやかに示す頂点はともかくとして、その前後の経過では、きはめて朦朧として、近代小説的な緊密な構成の上に立つ性格は持ってゐない。近代小説的立場から見れば、最も食ひ足らないのであるが、これは、全実録に通ずる特色であって、その点でも、柳沢騒動は一典型とも云へる。従って、近代の読者は一向に近づかないのみならず、研究者も、食欲を感じない類のものである。しかし近世人は、小説を読むことでも未熟であって、これを十分に面白く享受したことは、異本の様々出たことや、歴世の貸本屋の主要な商品であったことからも想像できる。万事秘密主義な近世では、将軍や大名の生活は、一般にはわかりかねたので、柳沢騒動の如きでも、或はさもあらうと思はれたのである。この系統の元宝荘子や源朝賢婦秘鑑などは、異本と照合したり、史実で注記して評を加へたりしてゐる態度からも、事実と考へた部分のあったことを物語る。母親の甘さ、姦通、主人をおしこめても家を立てるなど云ふことは、近世の封建社会の家庭には、道徳論が煩はしい程行はれたとは裏はらに多かった。実録の読者達は、最も大きな家庭である徳川家にもさうしたことがありさうなことだと、多少の誇張をそこに認めながらも、事実的読み物として読んだのであったらう。

叙上の三人の女性も、かくの如き読者の嗜向に応じて、紙上に出現し、性格が明確となり、そして作品の転化と共に成長して行ったものと思はれる。よって、以下、この三女性に一応焦点を据えて、転化の様相をうかゞふのも、無駄な方法ではないであらう。

二

柳沢騒動の最も原始的な姿をもつものは、日光かんたんの枕と題する。所見のものは十四枚半一冊のもの、増補日光邯鄲枕

の序に「世に日光邯鄲枕と題して、僅に十二三張ばかりの書本」と云ふのがこれである。綱吉の近臣で、これを直諫して、上州高崎に貶された八木主税（これは実在人物で、宝永二年の武鑑では、四百五十俵の御小姓衆としてゐる）なる人物が、日光廟に通夜して、主家の将来を祈願した処が、徳川家康の使者が夢に現はれて語るといふ形で、柳沢政治を批判攻撃するのが、その内容である。批難の対象は　生類憐みの令、大銭の鋳造、諸侯との婚姻、賄賂政治と、当代の事実の外に　吉保の任地甲府より駿府によって、乱をおこし、元来武田家の出である柳沢が、武田の仇敵徳川氏を滅亡させんとしたと誇張することもある。また綱吉の薨後、追腹を切りもせぬことを難じても居る。その攻撃の対象は、宝夢録（未刊随筆百種十二所収）などに見える落首と殆ど同じものであって、その限りでは、落首風政治批判のやや形式を整へたもので、まだ実録とは称しがたい。小説らしい夢中の趣向も、宝夢録には既に、東叡山通夜物語とて、松平輝貞が、綱吉の棺の宿直の夜の夢に、厳有院即ち綱吉の父三代家光が現れて、五代治下の弊政を論じたものがある。かんたんの枕と、この通夜物語との前後は、にはかに判じ難いが、いづれかの影響によるものと見てよい。この書には、まだ三人の女性は一人も見えない。吉保を云って、「剰世悴伊勢守（吉里）を将軍の落し種と号して、是へ天下をとらせんと謀る」と見えるのみである。これについては、実際に吉里が綱吉の落胤で、その母は綱豊即後の家宣の室近衛氏に従って京都から江戸に下つた染子なる女性で、吉保に賜った時妊娠してゐたとの、醇堂漫抄などの説を蔦魚翁は紹介してゐる。実録研究には、モデルとその虚構化の問題が、大きな課題なのであるが、転化の次第のみを目的とする本稿では、全く採り上げぬこととする。この書は大いに世の関心を引いたと見えて、正徳元年六月に成った黒田家五代目の奸臣隅田重時に筆誅を加へた福岡夢物語（列侯深秘録所収）は、久留米藩士が桜井の宮居で見た夢中談となってゐる。かんたんの枕の趣向に学んだものである。よってかんたんの枕は綱吉薨去の宝永六年（一七〇九）から正徳元年（一七一一）の間、一二年の間に出来たものである。この書の著者を、八木主税その人とする説（文廟外記）や「赤穂一件の時隠密御用に播州へ遣はされし御小人目付、仔細ありて改易せられし人が、上を恨み時を謗らんとて」（甲子夜話十九の林述斎説）と云ふ説があるが明らかでない。

正徳二年正月に京都の八文字屋から、頼朝三代鎌倉記刊本五冊の浮世草子が発販された。当時は正徳三年閏五月六日（徳川禁令考による）に、時事小説やモデルのある戯曲の禁止令が下りた程、政治や社会上の出来事を材とする作品が出現した頃である。この書も、鎌倉将軍頼家の時代にして居るが、比々として五代将軍治下のことで、後出するものと比較して、柳沢騒動の実録と同題材なのである。且つこの書の前後数葉は、話の本筋の部分と版下の筆蹟を異にする。本筋の部分より後に附されたものと見受けられる。そしてこの部分は頼家の臣八牧主水之助が、鶴岡八幡宮に参篭しての夢に、以下即ち本筋の如きを見たと云ふ開口と結びにあたる。前後の数葉の版下の相違によって、改題本かとの疑をもたれて居るが、本筋の部分の版下がなって後、前後をかんたんの枕によって作り改めたことによ

って生じた事象ではなからうか。ただし本筋にも所々、かんたんの枕によったかと思はれる点もあるが一々指摘しない。内容にも利用したかんたんの枕の趣向を、その後出版が近づいてから再び利用したと考へれば、この事象も理解出来る。違った版下を混ずるなどの不体裁を、このやうに考へて、しばらく改題説をとらないで置く。この書は浮世草子に相違なく、実録の転化を論ずる今は、詳述しないけれども、小説史と実録との接触をここに見ることは注目すべきである。この後も、浮世草子・読本・草双紙の素材源に実録がなってゐることは、若干指摘があり、指摘以外にも頗る多いと想像できるのだが、殆ど研究を加へられないまゝである。それは、実録研究の放擲・遅延に原因して、その為に小説史の隘路を生んでゐるのである。

将軍家の歴代の伝や政治上の問題をあつかったものを、後々講談では、御記録読みと云ふ。実録が、講談の種本であり、両者の関係の深さは、近世実録全書の発行の趣旨にも述べられて常識でもあるので、ここでは述べないが、日光かんたんの枕の内容は、一つの五代将軍政治史で、御記録読み風に発展する要素をもつものである。が一方、一国の家老などが主家横領を画策する筋は、講談では御家騒動と云ふ。伊達騒動、加賀騒動の類である。このかんたんの枕は又、御家騒動風に展開する要素をも持ってゐた。日光山通夜物語と題する一冊は、かんたんの枕を、御記録読み風に発展させたものである。かんたんの枕の夢中談の初めに、徳川家康が、かって是と云ふ字を片手で握った夢を見た。これは日下人を握る即ち天下人になる兆であるが片手即ち五代までは無事だが、六代目が心配だと夢判断されたことが見える。通夜物語は、この話を上げて、四代までの出来事をも述べて、五代に及んでゐるのである。御記録読みでは、女性の出る幕が殆どなく、吉里を落胤とする一条をそのままに存するのみである。かへって後々にも伝はる、百万石の墨付を小笠原佐渡守が、吉保から取りもどす一条が詳かであるのも、御記録読み風である。通夜物語の文字は前出の東叡山通夜物語と共通するが、この書の出現は、かんたんの枕をそれ程遠く離れない頃と想像する外はない。ただし所見本には処々に註記がある。吉里のことを「後松平甲斐守吉里ト号ス、和州郡山城主十五万石也」とする。この註記が著述時のものならば、吉里の郡山移封の享保九年以後となるが、それも確かでない。

かんたんの枕を御家騒動風に展開させたのが、増補日光邯鄲枕（近世実録全書第一巻所収）である。京大圖書館蔵の一本には、目録の中に、「寛延三午歳綴之」の文字が見える。そして序には、自分は壮年の頃、彦根の井伊家に勤仕してゐて、この事件の仔細をほゞ知り、親しい人々の所望によってこれを書いたと見えてゐる。この書によって、安永四年に元宝荘子（翁草第七十七・七十八所収）を著した可々陳人こと神沢杜口は、この書の著者を浪華隠士岡主計（日本随筆大成の活字では毛計とあるが、恐らくは誤写又は誤植であらう）としてゐる。文章は実録の常で違ってゐるが、同じ内容のもので、単に日光邯鄲枕と題するもの（大阪府立圖書館石崎文庫蔵）、日光霊夢記と題するもの（天理圖書館蔵）もある。この作品は、前の二つの作品に見える政治批評や御記録読み風のものは減少してゐて、挿話がこれにかはって入って来る。柳沢家出入の呉服屋菱屋庄右

ェ門、知足院円海後の護持院僧正のこと、悪浪人小山田与市、犬医者今川平助など、元禄当時の実在人物の話が、作意された本筋との関係をもって、処々に挿入されるのである。講談に今も義士外伝など云ふその外伝的なものが増加してゐる。これは他の実録の生長にも認める、実録拡大の常套的方法が、既に邯鄲の枕の増補として働き出したのである。井伊掃部頭が、云はば善玉の大将格となって、柳沢方へ密偵を放ったりして、盛に活躍するのも、この書に初出で、著者岡主計を、井伊家浪人とする所以でもあるが、これが実は御家騒動風の定った型でもある。そして御家騒動では、女性が加らねば、体をなさないのも一特色である。例へば黒田忠之と栗山大膳、男と男の意地の張り合ひである黒田騒動物の初期では、女性など全く関係がないのに、実録が、小説風になるに従って、愛妾お秀の方が登場する如くにである。柳沢騒動でも、この増補に至って、問題とする三女性が登場する。

しかし桂昌院は、旗本や富家が、上野御成の途中の綱吉に、自分達の娘が目にとまるやうにと願ふ所で、京都西陣の織物屋の娘が今は桂昌院とあがめられてゐるにあやかりたいと云ふ所に一度出るのみである。吉保の妻はお床と云ふ名で出て、柳沢邸に入駕した綱吉の前に、娘と共に侍したが、将軍の気に入ったのが母の方が先であり、やがて娘やその養女が寵を受けることになってゐる。しかしこの作品ではまだお床の方が受身であって、毒婦型とは云へない。この事実は柳沢家のことでなく同じく綱吉の近臣であった牧野成貞の妻阿久里（かって桂昌院の侍女であった）と、その娘安子であると、蔦魚翁による考証がある（大名生活の内秘）が、増補の話は、その実事とも亦違ってゐる。お床は王子村の庄屋三郎右ェ門の娘で、家運の隆盛を祈願して、吉明（後の吉保）は処々の稲荷に詣でたが、王子村の金助狐の祠が殊に信仰で、ここで吉明と恋におち入り、夫婦となったと云ふ。狐にからむ所が、あへて云へば少々妖婦めいてゐる。頼朝三代鎌倉記巻三には、吉保に相当する比企判官の館で、田楽見物の中狐があらはれて芸をする場があるが、何か関係があるのであらうか。綱吉の正室鷹司氏は、この増補で、もう既に護国女太平記と殆ど同じに、詳しく明確な姿をもって登場する。徳川実記などによると宝永六年正月綱吉が、同二月に鷹司氏信子が歿したのは、共に流行の麻疹であった。それを正室が将軍を弑したとしたのに何かより処があったのであらうか。八文字屋本の鎌倉記でも、綱吉にあたる頼家を、愛妾の阿波の局が弑して自らも死ぬことになってゐる。後年の元宝荘子にも秘説として、井伊直興と謀ってこの行動に出たことを述べてある。噂があったとしても、鎌倉記の影響は、お床の場合と合せて、無視出来ない。ここには、浮世草子の影響を実録が受ける、前出とは逆の小説史と実録の交渉が存することを見殘してはならない。この鎌倉記が明和四年に、大阪の升屋から改題して出された時の書名が、桜御殿邯鄲枕であった。前後二つの柳沢騒動の実録とこの浮世草子の関係を当時の人は既に察知してゐたのであった。増補邯鄲枕の成った寛延三年（一七五〇）は、綱吉薨去、柳沢失脚より約四十年、二昔を経てゐる。真実を伝へるにも、虚疑を構へるにも、誠に恰好な年次的な間隔である。その上実録全体の歴史の上からも、創作小説が漸く貧困

になった空隙を埋めるべく、実録の流行期を目前にのぞむで、それまで実記であった実録の素材となる記録が、足並を揃へて小説化への飛躍を始めた時であったのである。

安永四年の六十六叟可々陳人即ち翁草の編者神沢杜口の序をもつ元宝荘子は、やはり柳沢騒動の一異本と見なすべきであるが、小説化した増補邯鄲枕について、「今粤に載る処は、主計が臆見を較正し、且俚詞迂遠を除き、其大旨を述べるのみ」とあって、むしろ実説を求める態度である。異説を上げ評を加へる。虚実混淆の実録の発達過程には、よく出現する種類のものであるが、翁草巻七十七、七十八に収って、活字化されてゐるので詳には省略する。

三

増補日光邯鄲枕とその類の写本は、所見本は皆三巻であるが元宝荘子の序には七巻本のあることを述べる。大阪圖書館石崎文庫本の附箋によって、異本に十二巻本のあったことを知るが増補日光邯鄲枕が、内容を更に豊に十五巻となり、面目を改めて、名も護国女太平記として出現したのは何時頃であったらうか。十五巻本にも文章の違った異本があるが、まだ成立年次を明記したものを、筆者は見てゐない。しかるに、寛政五年（一七九三）正月大阪坂東座（中の芝居）の二の替りに出た、近松徳叟作のけいせい楊柳桜は、世界は足利将軍の代であるが、「楊柳」の文字を演題にも入れて、柳沢騒動を材としたものであった。その脚本は見るを得ないが、伊原氏の歌舞伎年表によると、足利義教が綱吉、一色結城守が吉保、正木主税が八木主税にあたる。そして二世嵐三五郎が、その義教と淀屋辰五郎を一つとめてゐる。柳沢騒動とほぼ同じ頃の出来事淀屋辰五郎闕所問題をからませたのは、実録では、十五巻本女太平記をもって始めとする。また結城の奥方をねざめと称するのも、十五巻本で柳沢の妻をおさめとしたことのもじりとすれば、けいせい楊柳桜は、十五巻本にもとづくものであり、十五巻本は寛政五年以前に、出現したこととなる。ただし脚本と実録を直接比較せずして、かかる断定を下すことはつゝしむべきである。当時の脚本では「なひまぜ」と称して二つ以上の事件を合せて、一本にすることは劇界の常道であった。柳沢騒動と淀屋一件を、歌舞伎の方で先になひまぜて、実録に影響を及ぼすこともないとは云へないからである。文政二年（一八一九）、四世鶴屋南北作の梅柳若葉加賀染は、名のごとく柳沢騒動と加賀騒動とをなひまぜたものであるが、ここでも同じく淀屋の宝物、金の鶏のことが見える。この脚本は南北全集にも収って、比較することが出来、ここに詳述しないが、明らかに護国女太平記の影響を受けてゐる。よって十五巻本は、文政二年以前の出現とは確実に云ふことが出来る。甲子夜話の述斎と静山の話は文政中葉のこと、そこでも護国女太平記の書名が出て居る。ここに歌舞伎又は浄瑠璃と実録との交渉と云ふ、実録にとっても脚本研究にとっても大きな問題のあることがうかがはれる。既に両者の関係は多くの指摘があるが、精査は殆どなされてゐないのも、実録側の調査の不備に原因してゐる。

十五巻本護国女太平記出現について、ここに一寸奇妙な実録がある。題して宝永太平記四巻一冊。登場人物は悉く柳沢騒動の

人々であり、吉保の妻はここでもさめと云ふ。十五巻本ではおさめが桂昌院や綱吉の前で、漢詩を作り和歌を詠じる。その同じ作品が、吉保の娘采女の作としてのってゐる。どう見ても、宝永太平記の方が、十五巻本の転化であるとしか思はれない。がそれが間違でないとすれば、変った現象があることとなる。宝永太平記の四巻と云っても、所見本で四十四丁、実録の転化は、後になる程分量が増大するのが、普通であるのに、これは小さくなったことになる。が熟読すると、この書で、柳沢のする行動の中に、田沼意次の行動がかなりに混じてゐるのである柳沢が先祖を飾るべく系図を求めたり、武田小三郎なる旗本に家に伝はる大文字の旗楯なしの鎧等々を求める一件は、有名な田沼が佐野政言に対した事件に相当する。その他にも柳沢の筋に巧に田沼のことを入れてあって、この書は一面に田沼騒動物でもあることとなる。田沼の実録には、星月夜万八実録、明烏一時夢などあるが、それらよりは早い形となると、田沼没落の天明六年に近い、或は宝永太平記は田沼の盛時中かとも思はれる。この想像があたってゐるとすると、十五巻本は既に天明年間にあったこととなる。宝暦から天明までの間は、江戸に馬場文耕、上方に吉田一保など講談の名人上手が出現して、口に筆に大活躍して、多くの実録も形を整へた時代であった。柳沢騒動も、その大勢と軌を一にして転化したのである。問題の三人の女性であるが、桂昌院は、この作品において、川柳にいはゆる「吉原を親のすゝめるうとましさ」の体相をつまびらかに示す。その母親に信用させて、次いで将軍に近づくに、漢詩や和歌の才をもってするのが吉保の妻おさめである。杉並養三と云ふ医者の娘となってゐるが、これは牧野成貞の妻をモデルとする説は既に紹介した。成貞の妻も学才があったと伝へるが、これらの学才は、或は吉保の妾であった松陰日記の著者、正親町町子などの面影が入って居るかも知れない。鳶魚翁の公方様の話によると、この町子が綱吉のお手つきとなった後に吉保に下された染子その人だと云ふのである。一説としてとどめておかう。綱吉に採入ってからは、遊女の業を覚えて、綱吉を耽溺させ、毒婦ぶりを発揮し、吉里を将軍の種と認めさせる膝づめ談判も、押強く悪人らしい。二十巻本を待たずして、三女性はこの実録として完成するのである。

次いで出現した二十巻本を、十五巻本と比較すれば、文章は十五巻同士、二十巻本同士にも相違があって、同じものはかへって稀であるが、事件の内容と推移については、二十巻本が一ケ所にまとめて九ケ条を加へたものである。増加の九ケ条は皆挿話で、元禄宝永間の様々のこと、米田伴内の三十三間堂の通矢、河村瑞軒の大阪川筋開鑿の一件、松平右京太夫の仁心、浅田鉄之丞の忠死などである。例の実録増大の常道挿話のさし入れによるものである。ただし二十巻本には、享保二丁酉仲秋上旬 東講散人の序をもつものがある（九大文学部）。しかし二十巻本の増加の部分に柳沢下野の名画の挿話がある。下野は文人柳里恭の晩年の称であって、彼がかく称したのは享保二年より後である。実録の年次などは、かうした古く見せる工作など稀ではないので注意を要する見本としてかかげておく。いづれ二十巻本はもう幕末になって、講談の材として増大したものであらう。挿話は皆、誠に講談向なのである。実録の中には、

講談そのまゝの口頭話体で書いたのも多いが、柳沢騒動物ではまだその種のものに接しない。しかし文語体であっても、これによって演ずる釈師が自由に描写を加へ、口頭話体にするのがまた常であったのである。明治八年上演の黙阿弥の脚本裏表柳団画は、柳沢騒動ものであるが、「講談其侭狂言脚色、則世界護国女太平記」と説明してある。

今一種、凞朝賢婦秘鑑（京大図書館蔵）なるもの五冊がある武陵逸士鴻の序があるが、何人か不明。内容は十五巻本に加筆したものであるが、読本風に引用文の多い漢語の美文を各条の初めにつらね、処々に叙情的な美文を挿入する。又一書として増補日光邯鄲枕を引いて比較すること多く、評語を加へる処もある。実録を、読本などに近い読み物とした試みであって、実録の本筋から少しはづれた異本である。詳述を略さう。

四

柳沢騒動が講談の材となったことを前述したが、今日、落語史が漸く形を整へつゝあるが、講談と云ふ甚だ日本的なと、云って悪ければ、近世日本的な舌耕の史的検討が全くおくれてゐるのは、咄本の調査にくらべて実録の整理がおくれてゐるからである。講釈師のゴシップを並べても、講談史は出来ないのである。また刊本の小説史と実録との交渉のあることを述べたが、近世小説史が全く刊本のみで構成されてよいかも亦若干問題がある。近世小説界は出版ジャーナリズムの上にのったことは事実であるが、中世さながらに作者のわからず、筆写の度毎に変動し、写本で、今日からの予想を遥に上廻る広い流布を持ってゐた実録と云ふ小説のおびただしい数の存在を全く無視してよいものであらうか。今後に多くの課題のある実録研究であるが、今回はただに柳沢騒動物の異本の基礎的な調査のみにとどめる。